

越境者としての陶晶孫 — 「淡水河心中」論

黄 英 哲

一、ある自殺事件

一九五〇年一月十四日、『中央日報』の第四面すなわち社会面に、「淡水河辺の水門にて、少女首吊り自殺発見、残された遺書に自殺の理由、恋人と結婚できぬため」という見出しの記事が載った。

【本紙取材】昨日の午前六時すぎ、さわやかな朝方の良い天気の下、淡水の河辺の十三号水門にて、二十才前と思われる美しい女性の死体が発見された。(略)。頸部にはボーイ・スカウトが使用する麻縄が巻きつき、遺体のあった護岸の上には、ちぎれた麻縄の片割れが垂れ下がっていた。

この美しい死体のことは、午前六時ごろ附近の住民に発見されると同時に迪化街の派出所に通報され、市警の第一分局に報告された。地検にもすぐに通報が行き、検察官が法医及び書記官を現場に派遣し調べた結果、首吊りと判明した。同時に彼女が身につけていたものも見つかったが、それは三冊の本すなわち『中国語言教授法』・『中国語言語文学』（以上はともに日本語のもの）と王西彦著『春野恋人』、および遺書二通であった。一通は白封筒で普通の便箋に書され、父母にあてたもの、もう一通はピンクの封筒で洋風便箋に書してあり、彼女の恋人である台湾放送局の張白帆あてであった。このほかハンドバックの中には九十元の新台湾ドルと身分証もあった。彼女の名は陳素卿、十九才で、台北県の人、住所は樹林鎮西園新德里三十二号、桃園女子高等学校の卒業である。(略)警察は遺書をもとに放送局の張白帆を探し当てた。彼はその知らせを聞くや、双涙こぼれ、すぐさま現場に駆けつけた、(略)。

張白帆によると、張は廈門の人で、今年二十四才、民国三十七年に『閩台日報』の副刊の編集者として入社し、陳素卿は会計係として働いていた。二人はそこで出会い、張が文学好きであったことから、陳もその影響を受け、徐々に相思相愛の仲となった。その年の十二月、張は台湾放送局の非常勤アナウンサーとなり、三十八年の一月には、放送局の専任編集者として転任した。陳も新聞社が閉社したため家に帰った。しかし、離れ離れになっても思いは消えず、二人の愛はいや増すばかり。たびたび同じ部屋に泊まったが、純潔を保ったままで、思いはそれによってさらに強まった。しかし陳の父母は、張との結婚には絶対反対で、張は何度も申し込み、仲人を立てたが、どうしても聴き入れなかった。

こうした状況の下、張の友人は、女方の父母が結婚に反対している以上、事を長引かせてもいたずらに苦痛が増すばかりだと言い、張に結婚によって彼女への思いを断ち切ることを勧め、彼に放送局の同僚で北平（今の北京—筆者注）出身の徐冰軒を紹介した。二人は知り合って二ヶ月余りで関係ができ、そのため三十八年六月に結婚。現在、徐は妊娠中である。林（張の誤り—筆者注）と徐の結婚後、陳はなおも張と清らかな関係を続け、時々は交際することを希望した

が、張の妻徐冰軒の冷やかな眼と痛罵を前にしてはいかんともし難く、いつも張のオフィスに来てこっそり張を眺め恋情を慰めていた。一ヶ月前、張と一緒に写真を撮りに行って欲しいと求めたが、この時にはすでに自殺の決心をしていたらしい。十二日の午後、張は陳から樹林から出て来るので必ず七時半の上りの列車に間に合うように台北駅に迎えに来てくれという電話を受けた。張がその時間に駅で彼女を出迎えると、彼女は用事があるって中正東路の外祖母の家に行くというので、張は彼女に付き添って中山路口に来た。すると彼女はまだ食事をしていないという。そこで二人は食事に行ったが、今度は、外祖母のところへは行きたくない、列車で樹林に帰るので見送って欲しいといい出した。待合室で陳は昔の事をあれこれ言い、張の肩上に顔を伏せてさめざめと泣いた。張はやさしく慰め、陳は身につけていた腕時計を張に贈ろうとしたが、張はいたずらに苦痛を残すだけだからと婉曲的にこれを拒んだ。しかし、陳が壊れた時計なので代わりに修理に出して欲しいと頼んだため、彼はそれを受け取った。その後、彼女は彼が七番のバスで出勤するのを見送ったが、それが永遠の別れとなった。そして十三日午前九時、彼女が亡くなったという訃報が突然届いたというわけである¹⁾。

同日の『中央日報』第二面には、亡くなった陳素卿が張白帆と父母にあてた遺書二通の全文が掲載されている。見出しは、「家の反対で鴛鴦の契り成らず、悲憤のあまりの自殺で純潔は永遠に、陳素卿の張白帆にあてた絶命の書」である。

張白帆あての遺書には、このように書かれていた。

私の愛する張：

これは私が最後にあなたに送る手紙です。けれどもどうか悲しまないでください。私はこの手紙であなたにたくさんの事を伝えようと思います。私は以前私の苦しみをあなたに話したりしませんでした。今は全てあなたに言うつもりです。(略)

張！私はあなたを怨んでなどいません。私はただただ自分の運命が恨めしい、自分の家が恨めしいのです。もし私の父母が初めから私とあなたの結婚に同意してくれていたなら、今のようあなたをあの女に取られたりはしなかったはずですし、私も自殺という道を択ばなかったでしょう。私は私の家がどうしてかくも外省人（戦後、台湾に渡ってきた中国人—筆者注）を目の敵にするのが恨めしいのです。私は彼らが前世で外省人からどのような侮蔑を受けたのか知りません。(略) あなたは私に中国語を話し、中国文を学ぶことを教えてくれ、私にどのように人になるのか、どのように友となるのか、どのように父母に孝行するのか、どのように祖国を愛するのか、どのように努力して勉強するのかを教えてくださいました。あなたは私が今まで知らなかったことをたくさん教えてくださいました。私に人生がどんなに有意義なものであるかを気づかせてくれ、あなたがいかに偉大な人で私が敬愛するに値する人だと気づかせてくれました。(略)

私はあなたを怨んではいません。私はただ私の父母がどうしてあなたに嫁ぐことを許してくれなかったのかと恨んでいます、本当に恨み骨髓です。私はまた自分がどうしてこれほどお人よしなのか、どうしてあなたを奪い返すことができなかったのかと自分自身を恨んでもいます。それでもやはり私はあの狐狸の精が、どうしてあなたを奪い、私とあなたが友人になることも許さず私を自殺に追い込んだのかと恨んでいます。(略) 張！私はあなたを永遠に愛しています。もし人が死んで幽霊になるのだとしたら、二人がともに幽霊になったとき、あなたは私をもう

一度愛して下さいますか？けれど、張！私はあなたに幸せな生活を送ってほしいと思っています！

あなたを愛する人 素卿書²⁾

もう一通の父母にあてた手紙にはこのようにある。

お父さん！お母さん！

私はあなたがたに永遠のお暇を告げます：けれどどうか悲しまないでください。あなたがたは私をここまで育ててくださいましたが、私はもう永遠にあなたがたのお側でお仕えすることはできません。これは最大の親不孝です、そのため私は今この道を択ぶにあたって、とてもつらく思っています。(略)

私の苦しみについて、私は何も話したことはありませんでした。私はただあなたがたが悲しまないように、張さんを傷つけないようにお願いするばかりです。張さんはとてもいい人です。私は死にゆく今でも彼を愛しています。どうか、決して張さんを傷つけないで下さい。彼はでたらめな人間ではありません、彼は私に申し訳ないと言っていますし、私たちの間の愛は今に至るまでずっと清らかなものです。この点だけは私はあなたがたに胸を張って言えます。どうか決して彼を傷つけないでくださいね！私はまたあなたがたが今後は外省人を目の敵にしたりしないように願っています。外省人には悪い人もいますが、本省人（地元の台湾人—筆者注）よりもいい人もたくさんいます。もし、妹の素娟が将来、張さんのような外省人を好きになったら、どうかもう反対したりなさらないでね！末尾ながら、あなたがたの健康をお祈り申し上げます。

あなたがたの親不孝な娘 素卿より³⁾。

このニュースと遺書が報道されるや、市井ではすぐさま議論百出し、世の注目を集める社会事件となった。メディアは微に入り細を穿つように続報を追いかけ、民衆も競って文をしたため、投書によって己が意見を述べた⁴⁾。続報の中にはこういうのもあった。「駆けつけた家族は、悲憤のあまり、彼女は自殺ではなく殺されたのではと疑った。彼らはこれほど長文でこれほど上手い遺書が、彼女に書けたはずはないと思ったのだ。警察が彼らに彼女が書いたそのほかの文を持ってこさせ、遺書の筆跡と対照し、かつ法医学者のところに紹介し、法医学者が理論上自殺だと断定した理由を説明してもらった」⁵⁾と。しかし、またまもなくして「遺族は誤解を解き、張に絆を断たぬようにと頼んだ」⁶⁾という報道も出た。

人々の文章や投書の内容には、当時の社会のさまざまな波紋や論評が映し出されており、その中には社会の現状という角度から分析したものがある。一つには陳素卿を封建社会の犠牲者とするもの。二つ目には地域の観念の犠牲者とするもの。三つ目には三角関係の犠牲者とみるものである。しかし、陳素卿を自殺に追い込んだ最大の原因については、やはり本省人と外省人の間の溝だとする意見が多かった⁷⁾。さらに純粋な男女問題として見ようというのもあり、「彼女と彼の間になにがあったのかその内幕は知りようもないが、遺書を見る限りでは、張氏は自分が無実だとは言えまい、かつての彼女に対する愛が真実だとしたら、単に彼女の両親に偏見があったというだけで彼女を捨てるなどと、張氏は本当に彼女にひどい事をしたのだ、彼女を裏切ったのだ」⁸⁾と述べている。

この社会事件は一般市民の関心のみならず、当時台湾大学の学長だった傅斯年の関心をも引いた。彼は陳素卿に同情し、台湾大学の文学院（院は学部に相当―筆者注）院長沈剛伯や台湾出身の心理学科の主任蘇薌雨、中国文学科の教授毛子水と連名で、募金によって陳素卿を手厚く葬ることを発起し、『中央日報』に次のような投書をした。

編集者殿：

連日貴紙に陳素卿女史の死およびその遺書のことが報じられ、同僚は寄ると触るとその話でもちきり、悲しみにたえません。これほど深く人の心をうつとは。陳女史の死については、死に値するかどうかを論じる者もあり、咎を社会制度に帰せしめる者もいますが、これらはみなうわべの議論であり、性命の道には達していないものです。陳女史の才はその文に現れています。二年学んだだけで、このような天成の作が書けるとは。後世に名を遺さずにいられましょうや？精霊の誠は、かくてこの文を作らせ、それは私も及ばぬものです。私に書けないというより、私にはこの真実の情がないのです。（略）世の中の身をもって道に殉じる者は、或いは外部から要求されてのことで、人が貴ぶべきだと言うのは、懐いを同じくする者の情によるものです。陳女史は赤子のような純真な霊心に殉じたのであり、これより勝るのです。漢末の焦仲卿夫妻のような悲劇は、ありふれたことで、昔の婚姻には多くあり、しかも二千年もの間続いてきたのです。今陳女史が遭遇したのは、世間の矛盾の極みであり、命を捨てて道を守ったのです。昔、溺死した冤禽は石を銜んで海を埋めようとし、ついにそこが巨洲となったとか。国を失った望帝は帰ることを思うがあまり羽化して杜鵑となり、その思いを叫びつづけたとか。詩人はかつてこのことを詩には詠みましたが、その義は十分に伝わらず、古を好む者はこれを記録したものの、その解釈は示されませんでした。今、この出来事を見、この事を沈思すれば、遠い昔の神話も、頓にその義を識ることができます。われ等はこの台湾島に寓居し、書耕で暮らす身。奇を伝えるべき大文筆が書けぬことが恥ずかしく、天の破れを補修するような力もないことを深く憾みに思っておりますが、心を同じうする者とささやかな金を出し合い、陳女史を清き山水に囲まれた、俗世の喧騒から隔絶された所に葬り、その墓石に「陳女史に同情する者ともに彼女をここに葬る」と書きたいのです。長い年月を経て丘や谷が形を変え、文字が消えようとも、宇宙が減びぬ限り、その御霊も永遠に亡びることはないでしょう。

貴紙がもしこれに賛同していただけますなら、どうかこの書簡を掲載し、これに呼応する者が名乗り出てくれるようにお取り計らい下さいますようお願い申し上げます。

傅斯年 沈剛伯 蘇薌雨 毛子水
一月十八日⁹⁾

この投書が掲載されるとすぐに他の学者から反応があった。大陸から台湾に渡ってきた著名な戯劇学者齊如山はこの投書にすぐさま賛同の意を表明し、改葬だけでなく、その事跡を教科書に載せるようにすべきで、少なくとも民衆の読み物にしたいと主張した¹⁰⁾。傅斯年と毛子水はともにかつての五四運動の闘士で、白話文を提唱し、封建主義に反対し、自由恋愛を主張した人物である。五十年代、国民党政府が台湾に遷って間もない時期、地元台湾の人々と大陸から来た人々の間には齟齬があり、「国語（中国語）」普及運動もまだ進んでいなかった。陳素卿の遺書は、自由恋愛の末の悲劇、「国語」学習への努力、中国新文学の愛読、流暢な中国語の遺書、またそれらを伝授した「外省人」のプラスイメージ、死をもって外省人を恨まないように訴えたことなど、学者の共感を得やすいも

のであった。学者たちもこの事件を契機に外省人と本省人による省籍対立が徐々に解消されることを期待した。そして、台湾中を驚かせたこの自殺事件は、その後中国の著名な現代文学者陶晶孫の日本語作品「淡水河心中」の素材ともなったのである。

二、台湾時代の陶晶孫（一九四六～五〇）

本稿でとりあげる陶晶孫は、中国・日本・台湾を行き来した「越境者」であるが、台湾文学史の中では完全に忘れ去られた作家といえる。しかし彼の文学作品の中の一ページに台湾があることは間違いない。

陶晶孫は、本名を陶熾、又の名を熾孫といい、晶孫・陶蔵・烹斎・冷孤原などの筆名をもつ。一八九七年、江蘇省無錫に生まれ、祖父は太平天国の官吏であった。父は廷枋といい、秀才に及第していた。幼い頃は郷里の廷弼小学で学び、一九〇六年に父が東京に居を移したのにもとない姉とともに来日し、東京の錦華小学、東京府立第一中学、第一高等学校へと進んだ。一九一九年、九州帝国大学医学部に進学。郭沫若の一級下にあたり、九州帝大に入学後から文芸に対する思いを深めていった。一九二一年春、郭沫若・郁達夫・何畏らと共に同人誌『グリーン』を創刊し、陶晶孫は第二号にその日本語による処女作の短篇小説「木犀」を発表している。同年七月、郭沫若・郁達夫・張資平・成仿吾らと共同で「創造社」を設立、「芸術の為の芸術」を提唱した。一九二三年四月、九州帝大卒業後、東北帝国大学理学部物理学教室に転入し、同時に医学部生理学教室で電気生理学の実験に従事。また学業以外では交響楽団を組織し、指揮も務めた。翌年、郭沫若の日本人妻佐藤をとみの実の妹佐藤操と結婚。『創造季刊』・『洪水』などの中国の文学雑誌に短篇小説も発表している。一九二六年、陶晶孫は医師免許を取得して東京に移住、東京帝大医学部の助手となり、また非常勤で東京帝大附属泉橋慈善医院の医師としても勤めはじめた。二七年、代表作短篇小説集『音楽会小曲』を、上海の創造社出版部から出版したが、これは後に、日本の新感覚派の影響を受けた中国最初の作品と呼ばれることになる。

一九二九年、陶晶孫は二十三年間の日本での生活に別れを告げ、中国に帰る。九才の小さな留学生から、東京府立第一中学・第一高等学校・九州帝大・東北帝大へと進み、そこで数々の薫陶を受けて、彼は中国の新時代を担うインテリへと成長していた。戦前の高等学校や帝大は日本の統治階層を育成するための高等学府であり、陶晶孫はこの高等学府で当時の日本の西洋式の高度な教養教育や専門職の訓練を施され、音楽や文芸などの芸術的素養を身につけ、科学者であり文学者でもあるという身分を得た¹¹⁾。陶晶孫のこの帰国は、彼にとって再度国境と語境を越えることを意味した。

帰国後、陶晶孫は上海の東南医学院教授となり、同時に創作活動を続け、日増しに左翼の文芸や戯劇運動に傾斜して行く。特に人形劇に傾注し、彼はそれまでも農民出身の日本の士兵が覚醒していくさまを描いた反帝劇「勘太和熊治」を創作し、ドイツの劇作家ハンス・ザックスの劇「バカの治療」を翻訳し、人形劇の解説等を雑誌発表しているが、一九三〇年にはそれらを集めた『傻子的治療』を上海の現代書局から出版した。同年三月に「中国左翼作家聯盟」（通称「左聯」）が成立すると、陶晶孫はそのメンバーとなり、八月には郷里の無錫にて厚生医院を開業した。一九三二年、厚生医院を閉めた彼は上海に戻り、東南医学院教授公共衛生学教授となり、日本人が創立した上海自然科学研究所の研究員を兼任し、寄生虫学などの調査研究に従事する。一九三七年七月、日中戦争

が勃発したため東南医学院は重慶に疎開。八月に上海で八一三事変が起こると、妻は三子を持って上海を出てしばらく難を日本に避けた。陶晶孫は生来身体が丈夫ではなく、病気がちではあったが、妻が戻る一九四一年まで一人上海に住み、上海自然科学研究所衛生研究室の主任として仕事を続けた。四四年五月には、散文集『牛骨集』を上海の太平書局から、さらに日本語による『陶晶孫日本文集』を華中鉄道から上梓し、十一月には、上海市代表として、南京で開催された第三回大東亜文学者大会に出席した。一九四五年八月、中国が日中戦争に勝利すると、陶晶孫と東南医学院院長の郭琦元らは日本軍の陸軍医院を接収するために南京に派遣された。そして一九四六年、彼は台湾大学医学院熱帯医学研究所教授兼衛生学研究室教授として、台湾に赴くのである。長男と次男はその時日本で学んでおり、そのため彼は妻と三男の易王のみを連れて台湾に向かったのである。

一九四九年十月、中華人民共和国が成立し、国民党政府は台湾に撤退。中国では陶晶孫の相婿である郭沫若が新しく中国人民政治協商会議全国委員会副主席に就任した。五十年代初頭の朝鮮戦争勃発前夜、中国は台湾を「解放」しようと準備を進めており、それに怯えた国民党政府はいわゆる「共産党分子」を弾圧しはじめていた。かつて「左聯」の一員であった陶晶孫が、このころどれほど厳しい政治状況下に置かれていたかは想像に難くない。五十年の年初に、国民党の秘密警察に勤める遠縁の張延生から、三男が学生運動に参加したことでブラックリストに載ったことを知らされた陶晶孫は、台湾を去る決意をする。同年四月、学術会議参加の名目で、一家三人で台北から日本に来た彼は、東京郊外の千葉県市川市に居を構えた。亡命に近い日本移住であった。陶晶孫は少年時代と青年時代を過ごした日本に再び戻ったのである。その後、一九五一年の年初に彼は日本の永住権を取得した。四月には東京大学文学部倉石武四郎教授の招聘を受けて文学部の非常勤講師として中国文学史を講じ始め、その一方で、寄生虫学に関する研究論文で千葉大学医学博士の学位を取得した。さらにこのころから『文芸』・『展望』・『歷程』などの文芸雑誌の原稿依頼に応じる形で、日本語による創作を再開し、徐々に日本文壇の注目を浴びるようになる。旧知の間柄であった佐藤春夫・草野心平・河上徹太郎・内山完造と交際するほか、時には詩の雑誌『歷程』の同人とも交遊をもった。

一九五二年二月、肝臓癌のため千葉県市川市国立国府台病院で死去。享年五十五。同年十月、日本の友人が晩年、日本で発表した作品を整理し、『日本への遺書』と題して東京の創元社から出版した¹²⁾。

陶晶孫が台湾に赴いた理由については、これまで三男の証言により、陶晶孫は台湾の旧台北帝国大学を接収するために台湾に行ったのであり、彼をこの仕事に推薦したのは当時国民党政府の衛生部長（日本の厚生大臣に相当）だった羅宗洛で、陶晶孫は医学院教授兼熱帯医学研究所所長として招聘されたとされてきた¹³⁾。

筆者の調査によれば、一九四五年十月、国民党政府は羅宗洛を教育部台湾区教育復員輔導委员会主任委員兼特派員という身分（この委員会の委員には、秘書を兼ねる梁龍元・杜聰明・蘇歩青・劉光華・陳建功・馬廷英・蔡邦華・陳芳之・陸志鴻がおり、専門委員には林忠・瞿絡琛がいた）で、台北帝国大学の接収のために派遣した。羅は十月十七日に台湾に到着、十一月十五日に正式に台北帝大を接収し、台湾大学学長代行（一九四五年十月～四六年七月）¹⁴⁾となっている。その後、五〇年に陶晶孫が台湾を離れるまでの間、台湾大学の学長は陸志鴻（一九四六年八月～四八年五月）・莊長恭（一九四八年六月～四八年十二月）・傅斯年（一九四九年一月～五〇年十二月）と替わった。

陶晶孫が台湾に赴いた理由に関する三男の話には、おそらくは記憶違いがある。なぜならば、当

時陶晶孫は教育部台湾区教育復員輔導委員会のメンバーではなく、羅宗洛も国民党政府の衛生部長ではなく、彼が遺した「羅宗洛回憶録」・「接収台北帝国大学報告書」・「接収台湾大学日記」（一九四五年十月十七日～四六年六月三日）¹⁵⁾の三種の記録にも陶晶孫に関する記載は一切出てこないからである。

三男の回想の中に出てくる「保存してあった国立台湾大学の招聘状には陸志鴻学長の署名と公印があった」¹⁶⁾についてだが、これは陸志鴻が台湾大学の学長になった一九四六年八月以降に陶晶孫が台湾大学に奉職したことを推測させるものだが、なぜ台湾大学に就職したかについてはさらなる考証が必要と思われる。さらに、三男のいう「医学院教授兼熱帯医学研究所所長として招聘された」というのも疑問点が多い。一九四六年の「熱（熱の誤り—筆者注）帯医学研究所職員録」には「所長代理杜聰明」¹⁷⁾と書されており、職員録に陶晶孫の名はない。一九四七年一月の「国立台湾大学熱帯医学研究所教職員録」には「教授兼所長 洪式閩 浙江 三十五年（一九四六年—筆者注）八月着任」とあり、この職員録には陶晶孫の名が見えている。職員録には「陶熾 上海施高塔路施高塔里二号」とあり、本籍や着任の時期は記されていない¹⁸⁾。同年八月の台湾大学教職員名簿でも、医学院熱帯医学研究所に陶晶孫はいて、本名の陶熾として見え、研究所の所長は洪式閩となっている。さらに陶晶孫は医学院衛生学研究室のところにも教授として出ている¹⁹⁾。一九四七年に陶晶孫と同時期に熱帯医学研究所で副教授だった鄭翼宗も、「傅斯年の学長着任後に洪式閩所長は離任して大陸に帰り、一九四九年の新年から熱帯医学研究所所長は邱賢添が担うことになった」と証言している²⁰⁾。これにより陶晶孫が熱帯医学研究所の所長だったという説は検討の必要が出てこよう。

陶晶孫の台湾時代の活動で、現在確認できた部分を下表に示しておく。

時 間	活動内容
一九四六年八月	台北到着、台湾大学医学院衛生学研究室教授兼熱帯医学研究所教授に任ぜられる。
一九四七年十一月 十五～十八日	台湾医学会第四十回総会に参加。
十一月十六日	台湾医学会第四十回総会にて単独で「Metorchis 属両種吸虫研究補遺」（熱帯医学研究所 陶熾）を、共同で報告「郷村社会衛生研究（一）郷村飲用水調査（台北附近）」（熱帯医学研究所劉万福・王長流・陳拱北・陶熾）を報告。
一九四九年 十月二十八日	中国語と英語による調査報告提要「台湾郷村之社会衛生学的研究（三）台北附近郷村常食調査」（国立台湾大学熱帯医学研究所衛生学科 陶熾孫）を『台湾医学会雑誌』第四十八卷第九—十号に発表。
十二月十八日	台湾大学三十八年度第一次校務会議に出席。
一九五〇年 二月十八日	中国語と英語による共同調査報告提要「台湾郷村之衛生学的研究（一）台北近郊郷村飲料水水質調査」（国立台湾大学熱帯医学研究所衛生学科陶熾孫、陳拱北、王長流、劉万福）、「（三）台北近郊郷村常食調査」（陶熾孫・陳淑瓊・葉根在）を『台湾医学界雑誌』第四十九卷第二号に発表。
一九五〇年四月	夫人や三男とともに台北から日本に移る。

* 国立台湾大学三十七・三十八・三十九学年度校務会議記録、および『台湾医学会雑誌』第四十七卷第一号（一九四八年二月二十八日）、第四十八卷第九—十号（一九四九年十月二十八日）、第四十九卷第二号（一九五〇年二月十八日）により作成。

文学の創作を愛する陶晶孫ではあったが、台湾時代は専ら台湾の公共衛生学の研究に没頭し、いかなる文学活動の軌跡も遺していない。同時期、彼とともに台湾大学にいた大陸出身の著名な学者や作家には、文学院院长の銭歌川、中文系の許寿裳・魏建功・台静農、教養科教授の黎烈文・李霽野や副教授の雷石榆らがいた²¹⁾。その中の雷石榆はかつて「左聯」東京支部の活動に参加していたのだが、彼は陶晶孫との交遊について何の記録も残していない。陶晶孫と台湾の地元の人々の関わりも非常に限定的なもので、上述した熱帯医学研究所で一緒に勤務していた台湾人の杜聰明や鄭翼宗の回想録の中にも彼に関わるものは一切ない。しかし、一方で同時期に医学院に属する解剖学研究室にいた有名な人類学者金関丈夫は、彼について次のような思い出を語っている。

昭和二十一年、台湾で初めて、(略)陶熾博士に会った(略)。台湾では私が台湾を去るまでの、三年あまりの間つき合った。当時博士は台大医学部の衛生学の教授だったが、講座はもたず、付属の熱帯医学研究所の所員であった。研究の上からいえば条件はよかったのであろう。しかし大学の給与は悪く、大陸から引揚げ同然に台湾へ渡った諸先生方の生活は、更に苦しかったはずだ。ただ多くの教授は、たちまち裕福そうな外観を取り始めた。いつまでも貧しそうだった少数の人々のうちに、陶熾博士はいた。ある日、医学部前の大路を黒い木綿の法衣のようなものをまとった、背の高い男が、少し前かがみになって。飄々乎として歩いている。近づいて見ると、陶熾先生だった。清貧の姿を私は見た²²⁾。

そして、台湾人が語った彼に関する唯一の思い出とは、彼が世を去り半世紀近くが過ぎてから出たものである。それは、台湾大学の柯慶明教授が亡父について語った文章の中にみえる。

東京帝大医部を卒業した亡父柯源卿は、光復後に一家(当時私はまだ一歳にもなっていなかった)を連れて台湾に帰った。台北で偶然遇ったのが、創造社の早期のメンバーで、その作品が『新文学大系』にも採録されている陶晶孫先生であった。陶先生は郭沫若の相婿で、ご自身は九州帝大医学部を卒業後、さらに東北帝大で研修を続けられた。同じく日本の帝大で業を受けた者同士、父に通じ合うものを感じていたのだろう。(略)

幼い頃、父母は日本語で「陶先生」と呼んでおり、我が家では権威ある存在であった。私に関することでは、「陶先生」は灰褐色のモダンでしゃれた子供の革靴をプレゼントしてくれたことがあり、それは戦後の物のない時代であったから、貴重な「宝物」のようなものだった²³⁾。

台湾時代の陶晶孫はなぜ文壇で口を噤んでしまったのだろうか。

日本の植民地支配を脱したばかりの台湾では、人口六百万人のうち日本語の使用率は控え目に見積もっても七十パーセントで、日本語文化圏に属していたといってもよい²⁴⁾。彼にとって台湾は見知らぬ土地ではあったものの、隔絶された「国境」でも「語境」でもなかった。筆者は当時の時代の空気から推測するだけだが、次のような事情によるのではないかと考える。国民党政府が台湾を接収したばかりの当時は文化出版の方面で制約が多く、雑誌や新聞で日本語の使用が禁止されたばかりでなく、中国語の作品を発表する場もかなり限られていた。さらに、文学者としての陶晶孫は、戦時中、日本が上海でつくった組織「中日文化協会」に参画し、第三回大東亜文学者大会の出席者

として活躍していた。このような芳しくない履歴が、台湾に渡って以後の彼に文学者「陶晶孫」を封印し、医学者「陶熾」という選択をさせた原因かもしれない。しかし、後年、日本に移ってからの陶晶孫は文字によって台湾を記録し、文学の中に台湾を「越境」した印を刻んだのである。

三、致命的な吸引力—台湾女子の大陸男子との邂逅

一九四五年八月の日本戦敗に際し、著名な作家龍瑛宗はこのように記した。「八月十五日は世界人類史上最も記念すべき画期的一日である。残虐で破壊的な鉄の鎖が解かれ、自由と平和が世界に溢れ、あまねく全市民を照らした。我が台湾もまた歴史の余波を被り、圧迫と黑暗から解放された」²⁵⁾と。この解放はただ台湾人全体が異民族の圧迫からの解放されたことを意味するばかりではなく、同時にまた台湾女性が根深い伝統的家族制度と父権社会から解放され、自由を追求しはじめることを意味した。

一九四五年十月、国民党政府は正式に台湾を接收し始めるが、戦後に台湾に渡った大陸出身の男性の大半は公務員か技術者であり、その中には既婚者もいれば独身者もいた。さまざまな機会を通じて台湾女性は大陸男性を識り、それは恋愛や結婚へと発展した。当時このような現象を皮肉った「台湾の光復にともない、女たちの桃の花があちらこちらでご満開」²⁶⁾という言葉もあった。しかし、あちこちで開く桃の花の中の陰には、糜爛した花も雑じっていたのだ。呉濁流はこの怪現象について次のように語っている。

接收の対象は日本人の資産に向けられただけではない、彼らは女性にも進軍していった。菊元（当時栄町にあった台湾一の百貨店—筆者注）の女店員から歌手の浜田嬢、私が知っている作家のお嬢さんもまた「接收」された。日本人に限らず、本省の相当の身分の娘さんも、少なからざる人が「結婚詐欺」の陷阱におちた。彼らは威風堂堂として媒妁人を立て、正式に結婚したのだが、しかし蓋を開けて見ると、その大部分はみんな第二夫人という立場だったのだ²⁷⁾。

台湾女性をはじめて大陸の男性に邂逅した戦後初期、すでに中国に妻や婚約者がいるにも関わらず、台湾女性と関係をもつ外省人男性が後を絶たなかった。一九四六年、ある彰化の女性が『民報』の投書欄「自由談論」に「外省から来た指導者の皆様方へ」という投書をし、怒りをこめて指弾した。「日本の封建主義の教育を受けた台湾女性は、籠から解き放たれたばかりの鳥のように世間知らずなのです」、「外省から来た指導者の皆様方」は、どうして「女性を啓発しようとは思わず、かえって女性の弱点を利用するのですか？」²⁸⁾と。陶晶孫が台湾に来たのは、こうした年だったのである。

大陸出身の男子がなぜ台湾女子にとってかくも魅力的にうつったのか？ 呉濁流は一九四八年に出版した日本語小説『ポツダム科長』の中で、この現象を印象的に描いている。

そこへ突然喫茶店で逢った件の男が訪れてきた。神ならぬ身の彼女はそれが本国から逃れてきた范漢智であるとは、夢にも思はなかつた。范漢智は今では名を改め、素性を隠して新たに范新生と名乗り、〇〇局の会計科長に居据つてゐた。

玉蘭は快く彼を迎へ入れた。祖国に対する憧れが無意識の中に彼女の腹の底から自ら蠢めき、

静かに祖国から来た人の身に這ひ上つて行くのであつた。つまり彼女の深い、声のない、思慕の情熱がある形態に凝結したからである。彼女すら解せない或るものが……、しかも漠然としたものである。

「この間は本当に失礼致しました。はじめての土地なので日曜日などは行く当てがなくて困つておりました。まあ、そういふわけで突然お伺ひしたんです」

と流暢な国語で范新生即范漢智は来訪の挨拶をした。社交に慣れた態度、油のかでか光る頭髮、身ががちり会つた洋服など、けふはまた一入スマートに見えるのであつた。慎しまやかで謙譲な話しぶり、殊に女性に対するその親切さはがさつな台湾青年とは凡そ異つた趣があり、何となく引き寄せられるやうな思ひだつた。そればかりではない。裕かな話題は彼女にとって悉く珍しいものばかりであり、殊に新時代に於ける上海女性の活躍ぶりが特に羨しく聞えるのであつた。

(略)

范漢智は玉蘭の家を辞してからかう考へた。

「台湾女性は技巧がなく素直で実に可愛いが案外情に脆いらしい。しかし、純真だ。純真なるが故に単純だ。単純なるが故に思ふ通りにもなれるのだ」²⁹⁾

呉濁流の描述から、大陸出身の男が台湾の女子にとって致命的な吸引力をもっていたことが理解できよう。台湾の光復後、台湾女性は台湾男性と同様に、はじめて接触した父祖の国—中国に対して好奇心と好感をたぎらせていた。彼女たちはこう思ったのである。—中国男子は立ち居振る舞いが温和で礼儀正しい人たちで、きれいな中国語をしゃべることのできる中国の男は、みな中国社会のエリートであり敬愛と信頼に値するのだと。

ここで再び陳素卿が張白帆にあてた遺書の中で再三強調していた言葉を見てみよう。「あなたは純潔な青年です、私たちは二年の日々の中で、あんなに親密だったのにもかかわらず、私に対してそのようなことを要求するそぶりは見せませんでした、(略) 私はいつもあなたがた外省人がそんなに真面目であるとは信じられませんでした」、「こんなにも誠実で、こんなにも努力家で、人に対してこんなにも優しいあなた、すべての面で私はこんな人にこれまで会ったことはありません。(略) あなたは私が今まで知らなかったことをたくさん教えてくれました。私に人生がどんなに有意義なものであるかを気づかせてくれ、あなたがいかに偉大な人で私が敬愛するに価する人だと気づかせてくれました。」³⁰⁾ 張白帆は陳素卿にとってこれほど致命的な吸引力をもつ存在であり、だからこそ陳素卿は死に際して張白帆にこのように言い遺したのである。「あなたは本当に偉大すぎました、あなたは私を教育し、そして去っていきました、私に世界中探してもあなたのような理想的な人はいないと思わせたのです、だから私は自殺するしかないのです」³¹⁾ と。ここからは、大陸から来た男子が戦後初期の台湾社会で圧倒的に優勢の位置を占めていたことが見て取れよう。

しかし、台湾女性と大陸男性の通婚は、詐欺や玩弄が頻発し、大陸出身者に嫁ごうという台湾女性が減ったことで年々少なくなっていく。この現象は最初外省人対本省人という省籍問題とは何の関わりもない、純粋に個人の問題であったのだが、二二八事件以後、この個人問題は省籍問題と関連付けられるようになる³²⁾。陳素卿の自殺事件はその典型的な例だといえる。一九五〇年とは二二八事件の三年後にあたる年で、台湾の人々にとってこの悲劇の記憶はまだ新しく、「外省人」に対する当初の憧憬も畏れや憎悪といった複雑な感情へと変化していた。二二八事件によって引き起

こされた省籍対立は、張白帆と陳素卿の恋愛にとって越えることのできぬ大きな溝となった。戦後初期の台湾社会にみられた絡み合った省籍問題が、張白帆と陳素卿の悲劇という形で現れたのだといえよう。

陶晶孫は一九四六年に台湾に赴任しているが、一九四七年の二二八事件の発生時には上海出張で一時的に台湾を留守にしていた。台湾に戻った彼は社会の奇妙な雰囲気を感じたはずである。一九五〇年一月に発生した陳素卿自殺事件は、省籍問題の存在を浮き彫りにし、台湾中を驚かせたのみならず、当時の台湾大学の学長傅斯年を震撼させるに至った。この台湾社会で起こった事件は、陶晶孫が日本に移った後でも消えぬほど彼に深い印象を与えたのである。陶晶孫はこの社会事件をもとにしつつ、自らが四年近く暮らした台湾の生活所感を織り交ぜる形で、フィクションでもありノンフィクションでもある日本語の小説「淡水河心中」を執筆したのである。

四、台湾の物語「淡水河心中」

陶晶孫の遺した台湾の物語「淡水河心中」は、作者の単なる台湾観察ではなく、小説という形を借りて当時台湾に赴いた文人の心境を吐露したものである。「淡水河心中」は一九五一年七月号の『展望』³³⁾に発表された。佐藤春夫はこれを読んでいく気に入りに、その時のことを「その新鮮な文体と自然科学者と詩人とを兼ねた独自の着想の尊重すべきを感じて、続々新作を期待したものだ」³⁴⁾と記している。小説の中の語り手智美は、外省人であるが日本留学の経歴をもつ台湾の「過客」である。作者はこの心理学研究室の助手という第三者の視点から、張白帆と陳素卿の事件を小説化した。小説では、心理学教室の助手である智美と教授の二人の会話を通じて事件のあらましが描かれ、虚実を交えた文体がこの小説に趣きを添えている。そして智美という第三者の視点による台湾についての語りは、この事件を借りて台湾に僑居していた外省人の心理を語ることであった。「淡水河心中」は社会事件をもとにした作品ではあるが、作者が描こうとしたのは戦後の台湾の姿である。彼は当時の社会にあった矛盾、特に外省人と本省人の間の隔絶や台湾の中に深く埋まった日本の記憶をはっきりと指し示したのである。

小説のあらすじは以下の通りである。

戦後、上海から台湾の大学に心理学科の助手として赴任してきた智美は、同じ研究室の若い教授との会話から、新聞に載ったある少女の自殺を知る。呉少貞という娘が、淡水河の十三号水門の下で、縊死体となって発見され、懷中に陳なにがしに宛てた遺書があった。中国語の白話文で書かれたもので、日本統治期の台湾の女学校を卒業したのでは、戦後いくら勉強しても到底書けぬ名文であった。陳というのは少貞の元同僚で、戦後中国大陸から台湾にやってきた外省人であった。外省人への愛のために台湾の娘が自殺したこと、遺書が名文であったことから、新聞はこれを大々的に報道し、大陸からやってきた人々の間で少貞は悲劇のヒロインとして祭り上げられる。外省人で、智美の勤める大学の学長も戦後の台湾教育界の指導者という立場から、少貞を顕彰する石碑を建てることを提案した。

しかし、外省人たちとは異なり、現地の台湾人の間では、少貞の死に関する不穏な噂が広がっていた。少貞は殺され淡水河に捨てられたというのである。その後、真犯人は遺書の宛先の人物、陳であることが明らかになった。少貞は陳を教養のある立派な学士と思い込み、彼に恋し、中国語を

教えてもらっていた。しかし陳には外省人の女がおり、少貞にも縁談がもちあがっていた。少貞は陳と心中する覚悟だった。ところがいざという段になって陳は少貞を裏切り、その死を少貞の単独の自殺であるかのように偽装した。あれほど新聞が熱狂した話題であったが、陳が逮捕されると外省人たちの関心はとたんに薄れ、智芙の大学の学長も自分は一杯食わされただけだと言い繕うのであった。

小説の冒頭部分には台湾の山林・河流・建築物が登場するが、これは主人公智芙が飛行機で上海から台北に飛んできた時の台湾の印象である。「左手の大屯山、右手の観音山が台湾入口の目標で、その間に淡水河が滑走路のように見える、これが玄関で、(略)注意して地上を見ればヨーロッパのお伽噺にあるような和蘭人の築いた古城にユニオンジャックが翻えり、その下の地上には日本の砲兵陣地がその縦横な道路を残している」³⁵⁾。地形図をたどるようなこの描写には、主人公智芙の第三者的な観察眼がある。この上海から来た青年にとって、台湾は「祖国」に復帰した土地であり、しかしまた異国情調溢れる「異域」である。平坦な台地、始終もやに包まれたいかにも蛮地の山らしい高く聳える山脈、椰子の樹、淡水河の伝説。—これらは全て台湾の異国情緒である。智芙のように日本経験を有する外省人の青年にとって、台湾のカオスは魅力的である。作者は台湾をスケッチする形で台湾がこれまで奴隷的に遇されて来たことに触れ、さらに「祖国に復帰」した台湾社会の中に潜む複雑な植民地時代の記憶や新参の統治者との間に存在する隔絶を暗示してみせた。小説の中には大陸と台湾の人々の物のとらえ方の違いに触れた箇所がある。

日本時代台湾人と云われるのをきらつて反つて本島人と云われるのが好きだつたから今でも台湾人と云われたくないと云うことの矛盾を考えてみる。本島人と云う詞こそ土民の扱いはないか、そんな所は中国内地人が「僕は山東人だ、君は台湾人だ」と云うその心持を理解しない、などと考える³⁶⁾。

ここで取り上げられた思考の違いは、戦後初期の台湾民衆と大陸から来た人々との間にある確執の核心を突くものであった。両者の間に横たわる五十年におよぶ断裂、加えて日本が台湾において実施した皇民化運動の台湾人への影響はあまりにも大きかった。戦後初期の台湾社会の言語や習慣は総じて日本統治時期の生活の延長線上にあり、思考論理もまだ植民地根性から脱しきれていなかった。後に二二八事件が発生してからは、もともとあった省籍問題がさらに激化したのである。小説の中で心理学の教授が重々しくいう「民族は民族を恐れる」—この言葉は、戦後初期の台湾と大陸は政治的には統一されても、台湾に来た外省人の統治者にとって、台湾人は所詮「異族」的存在であったことを示している。

「淡水河心中」の青年学士智芙は作者陶晶孫の化身といってもよく、日本語能力と日本経験を兼ね備えており、そのために彼は台湾社会にすんなり入り込むことができる。この貧しい外省人の青年が動き回る場所は事件が発生した十三号水門や一般の台湾民衆の生活圏「円公園」³⁷⁾である。彼は台湾語を解しないが、台湾の民衆は日本語を交えた話し方をするので、彼にも内容がわかる。「円公園」は智芙が台湾社会に入る玄関口であり、市井に溢れる巷の話の中から、この越境の「観察者」は台湾の図像を拾い集めるのだ。

戦後初期の台湾社会は、言語はもちろん思考も日本統治時代を踏襲しており、特に良い家柄の高等教育を受けた台湾女性は、その日本式に完全に馴染んでいた。かつての台湾社会では、高等教育

を受けたお金持ちのお嬢様たちは、家族の世話で家柄の釣り合いがとれたところに嫁ぎ、医者のお嬢になるか、商家の若女将になるかで、家同士での「縁談」によって結婚していた。しかし、日本の敗戦にともない中国に復帰した台湾社会にも変化が訪れ、高等教育を受けた台湾の女性たちは社会参加を開始する。こうして国民党政府とともに台湾にきた外省人男子と接触の機会が出来、両者の間の色恋沙汰も聞かれるようになった。この新参の外省人統治者は、かつての日本人の地位に取って代わり、台湾で社会的に優勢な地位を占めた。ピカピカの外見、堂々とした弁舌、きれいな中国語（あくまで台湾人にとっての意だが）、そしてとりわけ女性に対する懇篤な態度、これらに台湾女性は引掛かりやすかった。中国語の使用は新しい統治階層の権力の象徴でもあった。

ところが戦後台湾に渡った外省籍の人々の中には、呉濁流が描写した范漢智のように、范新生の名で台湾で新たに巻き返しを図ろうとした者もいて、台湾女性を弄ぶ人も数え切れず存在した。現実の事件の中の張白帆は、陳素卿にとって理想的な伴侶であったばかりでなく、人生の師でもあった。彼は陳素卿自身がイメージする美しい未来を象徴していた。人生の師を失うことは未来を喪うことであり、これにより彼女は死を選択した。この事件は当時の社会ではロマンチックに脚色され、さらに現代版「烈女伝」として伝えられた。陶晶孫はこの自殺事件を犯罪事件に仕立て上げ、「彼女の恋は内地人への引力であろう」と言い切った。これは台湾の女性の外省人男子への憧憬が、実際には幻想にすぎないことを喝破したものである。小説は陳不凡のエッセイ士ぶりを決めることで戦後初期の一部の外省人の取り繕った外面を引き剥がし、同時に当時この事件で碑を立て墓誌銘を作ろうという外省人名士の欺瞞と、その背後に隠された政治的意図を風刺した。実際の張白帆と陳素卿の恋愛事件の捜査は、最後には自殺という形で決着したが、その中に隠された不可解さや一部の外省人の動静は陶晶孫の小説の中に暴露されている。

心理学研究室内の助手智芙と若い教授の会話から始まるこの小説では、さまざまな角度からこの事件が記録されている。多層的な描写は事件の輪廓を浮き彫りにする。この台湾の物語「淡水河心中」には戦後初期の各層の心理がよく表れている。

最初に心理学の年若い教授の心情が描かれる。台湾人女性と外省人男性の恋愛事件はこの一時的に台湾にいる年若い教授のロマンチックな気持ちを掻きたてた。特にこの自殺したヒロイン呉少貞が名家の令嬢であったことと男性主人公の陳不凡が外省人出身であったことは、異国情緒というロマンチックなイメージにぴったりだった。また同時に呉少貞が遺した遺書に使用した「台湾の娘さんには書けないような中国語白話文」もまたこうした台湾の「過客」であった外省人に台湾教化の幻想を抱かせた。戦後初期に台湾にきた年若い教授にとっては、この事件は退屈な生活に彩りを添えるものでしかない。

その次に大学の学長³⁸⁾の反応だが、新聞報道があった当日、学長は早速筆を執り一文を書いた。「世に貞女多しと雖も我等辺疆の地に来て尚少貞の如きを見る。その遺書を見よ。少女純真の情、郎が無情を責めず、わずかにその妻を狐狸の精とたとえ、恋して成らずんば節を俣して淡水河畔に我身を以つて殉ずと。我等茲に日人統治の後をうけて辺民の先導となる時、如何にして少女が純情をたゝえん。余は我等有志、北投山麓、淡水を俯瞰するの地に碑を樹て、節女少貞殉節の記念と誌せんことを提唱する。」³⁹⁾もとは単純な恋愛事件であったのだが、学長という経学の大家の文を経て、話は台湾版の「烈女伝」に仕立てられていく。これは一種の政治的意図をもったやり方であり、事件を通じて揺れ動く台湾社会を慰撫しようとするものであった。

さらにこの事件は一般の外省人たちの茶飲み話のネタともなった。小説はこのようにいう。

二三日のうちに町は少女謳歌の小冊子がはんらんした。呉少貞の写真入りで美文を以つて綴つたものもある。自殺現場の写真を猟奇的にかいたものもある。歌曲の本も出来た。大陸にかえるのを待ちつゝ、退屈な人々が同じく退屈な人によませるためのなぐさみの作品だ。併し此等は台湾の人々とは関りが無い⁴⁰⁾。

上述したように教授や大学の学長から一般の外省人に至るまでの、この事件に対する彼らの認識には二つの側面がある。一つには大衆化した異国情緒に溢れるロマンチックな物語。もう一つは教化や政治目的によるもので、家柄の良い台湾女性が外省人の男子のために操を立てて自殺する事件は、新しい統治者である外省人グループの征服慾望を満足させるものだったといえよう。しかし、事件が自殺から他殺に転じ、ロマンチックな話が犯罪事件に一変すると、この教授と学長は示し合わせたように態度を変えた。教授は、「まあ此位でいゝだろう。昔生蕃の場合このために首がたくさん滅られ警察軍隊機関銃毒瓦斯の試験迄やるようになったことがあるからな。」⁴¹⁾ という。学長もまた「ロマンチック」と誉めたのを改め、今度は自分は一杯食わされただけだと言い張り、街頭で売られていた小冊子や小報、歌曲音譜画報などはたった一日で姿を消した。この事件に対して統治階層に属する陶晶孫は小説の中でこのように言っている。

内地人（外省人一筆者注）に全然責任がないとき、潜在恐怖のみならばこの美しい少女のロマンチックをほめて居られる。所が現実の責任を持つてみればそんなことは云つて居られない⁴²⁾。

智美は台湾の現地社会の玄関である「円公園」で事件についての真相を耳にする。外省人グループの圏内で喧伝されていたロマンチックな恋愛事件は単にグループ内での想像と伝聞にすぎず、「円公園」で聞いた台湾の市井の人々の話はこれとは全く異なっていた。そしてこの事件の結末について、警察は陳不凡への聴取から事実をつかんでいたという。「やがて淡水河水門の石垣に首を吊る外なくなつた時に一計を策し、繩の両端に各々首を縛り、その中点を石垣の疣に結びつけた。そのまゝ落ちれば正に井戸の繩つるべ見たいになる。所が飛び降りる時、彼は忽ちその疣に抱きつき、死を免れた。だから女丈け死んだ。それ丈けのことである。」⁴³⁾ これに対し台湾の民衆は、「日本人の訓練した警察だからすごい」というのであった。ここは過去の植民地の記憶が深く刻まれていることが明らかになる場面である。作者は巧妙に二つの社会の懸隔を描いてみせた。一つは新しい統治者の「国語」を操り、己の圏内で台湾をイメージし、台湾を恐れるグループ、もう一つは旧統治者の「国語」を操り、自らを正統とするグループである。陶晶孫の「淡水河心中」が語る台湾は、ただ台湾風土の描写などではなく、国民党政府が台湾に来た戦後初期の台湾の緊張した社会状況をしっかりと刻み込んだものなのだ。小説の中で智美は民族と民族の間の紛争についてこのようにいう。「民族はいづれも自分だけえらいと思つている、簡単乍ら自他共にわからない」⁴⁴⁾ と。戦後初期の外省人グループにとって、台湾人とは恐らくただ地域や出身が異なるということではなく、異族による統治を受けた「異民族」という存在だったのである。

五、結び

陶晶孫のこの台湾物語は日本で書かれており、この小説はこの「越境者」の四年にわたる台湾観察記といえる。「淡水河心中」とは陳素卿自殺事件の小説化ではなく、作者陶晶孫の台湾理解であり、戦後初期の台湾に来た外省人たちの心理を下敷きにしたものである。彼が同時期に完成させた日本語による散文「蘭花の変わり咲き—ある婦長の話—」⁴⁵⁾の中には戦後初期の台湾社会の怪現状—とりわけ一部の台湾人が外省人の統治階層と結託し名利を得ていく様子が生き生きと描写されている。その中では病院のある台湾出身の看護婦長が、政治変動に迅速に対応し日本風の姓から台湾の名字に変え、アメリカ留学から帰国したエリートという立場で首尾よく外省人グループに合流し権力を掌握していく過程を描いた。陶晶孫は嘆いていう。「民衆のためにも、本省の医師看護婦のためにも惜しいことであるが統治者の為いろいろな反対を押切つて行うのに、成功したのは彼女である。本省の人の中より出でて本省の人々のためにならなかつたことは甚だ惜しい。」⁴⁶⁾

台湾特有の南国の風情とこの土地で生活する人々は、すでに日本に永住することを決めた陶晶孫の心中に深い印象をのこした。これについて、彼はまたこのようにいう。「私はあの島の智や美や情熱をお伝えしたい」⁴⁷⁾と。陶晶孫にとって、この島は越境して寓居した人生の一駅ではあったが、それゆえに戦後初期の台湾社会の揺れと変化を深く観察し、作品を通して所感を記録し得たのである。

呉濁流の「ポツダム科長」や陶晶孫の「淡水河心中」は、ともに戦後初期の一部の外省人男子の台湾女性に対する玩弄や一部の台湾女性が外省人男子に自己の理想を投射しようとするさまを描いたものだといえる。しかし「淡水河心中」が企図したのは、陳素卿の事件を通じて当時の外省人の青年心理と権力者の姿を明らかにすることであった。小説を現実の事件とは異なる結末にしたのは、輿論が造形した陳素卿自殺事件のロマンチック的色彩も薄れるような省籍対立を風刺し、ロマンチックの背後にある政治的意図を明らかにするためだった。日本経験を有する陶晶孫だからこそ、彼の台湾観察には台湾に寄りそう気持ちがあったのだといえよう。

陶晶孫の一生とは、政治的境界や言語的境界を幾度も「越境」するものであった。彼は医学者でもあり、文学者でもあり、また社会的地位においても「越境」者の立場に在った。その小説「淡水河心中」もまた真実と虚構の垣根を「越境」した作品だといえる。陶晶孫は小説という形で自殺事件を取りあげたが、虚構によって、まことしやかに事件を伝える新聞報道の「真実」を書き換えた。でかどとした活字で報道される新聞事件による教化という虚構の中で、陶晶孫の小説という虚構は自殺事件の新聞報道の「真実」を転覆させてみせ、戦後初期の台湾社会の複雑な一面を露わにしたのである。

注

- 1) 報道の詳細は一九五〇年（民国三九年）一月十四日『中央日報』（第四版）を参照。見出しは「淡水河邊水門下 一少女殉情自勒 遺落兩封書信表明自殺原因 因為不能与愛人結婚」である。
- 2) 遺書の詳細は、一九五〇年（民国三九年）一月十四日『中央日報』（第二版）を参照。見出しは「家庭阻擾難締鴛盟 悲憤自殺永保純潔 陳素卿致張白帆絕命書」である。
- 3) 同上。
- 4) 一九五〇年（民国三九年）一月十五日『中央日報』（第四版）の「殉情女化痴情灰 陳素卿遺體昨已火葬」

- 張白帆今日為她開弔」という見出しの記事、十六日『中央日報』（第四版）の「殉情女灰置法藏寺 致祭靈堂雖無弔唁幛聯 但有更多的眼淚与嘆息」という見出しの記事を参照。読者景白と王白之の投書の題は、「陳素卿死得有價值嗎？」である。十七日『新生報』（新生副刊）には達妮による「愛情、你怎樣處理？—從陳素卿之死想起一個故事」、十八日『新生報』（新生副刊）には、無署名の「人性的控訴—哀陳素卿之死」、十九日『中央日報』（第四版）には「傅斯年等昨發起 補葬陳素卿女士 願同此心者集其薄貲」という見出しの投書、二十日『中央日報』（中央副刊）には、音の「陳素卿之死」と天嘯叟鄭烈の「弔陳素卿女士」、二十三日『新生報』（新生副刊）には言采薇「陳素卿死有遺憾乎」、二十四日『中央日報』（中央副刊）には齊如山の「兩個理由—關於改葬陳素卿女士—」が掲載されている。
- 5) 一九五〇年（民国三九年）一月十五日『中央日報』（第四版）の、「殉情女化痴情灰 陳素卿遺體昨已火葬 張白帆今日為她開弔」という見出しの記事による。同時に二人の熱愛時期の写真も掲載されている。
 - 6) 一九五〇年（民国三九年）一月十六日『中央日報』（第四版）の、「殉情女灰置法藏寺 致祭靈堂雖無弔唁幛聯 但有更多的眼淚与嘆息」という見出しの記事による。
 - 7) 一九五〇年（民国三九年）一月十八日『新生報』（新生副刊）、無署名の「人性的控訴—哀陳素卿之死」による。
 - 8) 一九五〇年（民国三九年）一月十六日『中央日報』（第四版）の、王白之「看陳素卿遺書感想」による。
 - 9) 一九五〇年（民国三九年）一月十九日『中央日報』（第四版）の、「傅斯年等昨發起 補葬陳素卿女士 願同此心者集其薄貲」という見出しの投書による。この文は『傅斯年選集』（第九冊、文星書店、一九六七年）一五九五～一九六頁にも見える。
 - 10) 一九五〇年（民国三九年）一月二十四日『中央日報』（中央副刊）の、齊如山「兩個理由—關於改葬陳素卿女士—」による。
 - 11) 戦前の日本の旧制高等学校の「大正教養主義」教育は、陶晶孫の人格や学問的素養を育んだ。詳細は巖安生『陶晶孫—もう一つの中国人留学精神史』（岩波書店、二〇〇九年）第一章、三～七十三頁を参照。
 - 12) 陶晶孫の生涯については以下の文献を参考にした。鄭仁佳「陶晶孫（一八九七～一九五二）」『伝記文学』第七十卷第五期、一九九七年五月、伊藤虎丸「解題 戦後五十年と『日本への遺書』（陶晶孫『日本への遺書』東方書店一九九五年所収）、陶易王「父親在台湾」・陶坊資「陶晶孫年譜」（張小紅編『陶晶孫百歲誕辰紀念集』所収、上海百家出版社、一九九八年）。
 - 13) 前掲陶易王「父親在台湾」十六頁。
 - 14) 李東華・楊宗霖編校『羅宗洛校長与台大相關史料集』（台大出版中心、二〇〇七年）一一四～一一八頁。杜聰明『回憶錄—台湾首位医学博士杜聰明』（下）（龍文出版社、二〇〇一年）一七九～一八〇頁。
 - 15) とともに前掲『羅宗洛校長与台大相關史料集』所収。
 - 16) 前掲陶易王「父親在台湾」一六頁。
 - 17) 民国三十五年（一九四六）『台湾省行政長官公署各單位及台北市各公共機關職員錄』二一七頁。
 - 18) 「国立台湾大学熱帯医学研究所教職員錄」（『国立台湾大学教職員錄』民国三十六年一月所収）。
 - 19) 『台大同学会會員名簿』民国三十六年（一九四七）八月、三十六・三十四頁。
 - 20) 鄭翼宗『歷劫帰来話半生—一個台湾人医学教授の自伝』（前衛出版社、一九九二年）二二六～二二七頁。
 - 21) 注 19 の二十七・三十六頁参照。
 - 22) 金関丈夫「陶熾博士のことども」『福岡医学雑誌』一九五二年十二月号（のち『南方文化誌』に所収、法政大学出版局、一九七七年）。ここでは『南方文化誌』の三十四頁より引用。
 - 23) 柯慶明「五四：印象与体験」（『文訊』総号二八三、二〇〇九年五月）八十五頁。
 - 24) 拙著『「去日本化」「再中国化」：戦後台湾文化重建（1945-1947）』（麦田出版、二〇〇七年）三十八頁。
 - 25) 龍瑛宗「最近文学界一瞥」旬刊『東寧新報』一九四六年一月二十一日（のち『龍瑛宗全集』第六冊に所収、南天書局、二〇〇六年）。ここでは『龍瑛宗全集』第六冊の二五八頁より引用。
 - 26) 游鑑明「当外省人遇見台湾女性：戦後台湾報刊中的女性論述（1945-1949）」（『中央研究院近代史研究所集刊』第四十七期、二〇〇五年三月）二〇九頁。
 - 27) 吳濁流『無花果』（前衛出版社、一九八八年）一一八頁。
 - 28) 注 26 に同じ。
 - 29) 吳濁流『ポツダム科長』（学友書局、一九四八年）十～十一頁。緑蔭書房二〇〇七年覆刻版より引用し

た。

- 30) 注2に同じ。
- 31) 同上。
- 32) 注26の二〇九～二一〇頁。
- 33) 「淡水河心中」は筑摩書房『展望』一九五一年七月号の九十五～九十九頁に掲載され、のちに『日本への遺書』（創元社、一九五二年）に収められた。本稿では『展望』に発表されたものをテキストとした。近年出版された丁景唐編選『陶晶孫選集』（人民文学出版社、一九九五年）、中国現代文学館編『陶晶孫代表作』（華夏出版社、一九九九年）、曹垂輝・王華偉訳の『給日本的遺書』（上海文芸出版社、二〇〇八年）には「淡水河心中」は収められていない。現在に至るまでこの作品の中国語訳はない。
- 34) 佐藤春夫「陶晶孫先生が遺著のために」（創元社版『日本への遺書』、三頁）参照。
- 35) 「淡水河心中」（『展望』一九五一年七月号、筑摩書房）九十五頁。
- 36) 同上の九十五～九十六頁。
- 37) 円公園とは現在の台北重慶北路と南京路の交差点「建成ロータリー」である。一九〇八年、日本がこの一画を公園としたため、「円公園」と称された。一九四三年アメリカ軍の爆撃のとき、日本人はここを掘って貯水池にしたことで防火施設となった。戦後は、埋められてロータリーとなり、露店が占拠して繁華街を形成した。二〇〇六年には取り壊しとなって整備され、現在はすでに往時の面影はない。
- 38) 『展望』に発表された「淡水河心中」では、校長（日本の学長にあたる）と院長、学長の呼称が混用されているが、「創元社版」ではすべて校長に統一してある。本文は「創元社版」に従う。
- 39) 注35の九十六頁。
- 40) 注35の九十七頁。
- 41) 注35の九十九頁。
- 42) 注35の九十八頁。
- 43) 注35の九十八頁。
- 44) 注35の九十九頁。
- 45) 「蘭花のvariety咲き—ある婦長の話—」はもと『看護学』一九五一年二月号に掲載され、後に『日本への遺書』（創元社、一九五二年）に収められた。本稿は『日本への遺書』に収められたものをテキストとした。
- 46) 前掲『日本への遺書』八十七頁。
- 47) 同上。

〔附記〕

本稿は、太田進同志社大学名誉教授が一九九三年十月に中国文芸研究会にて行った報告「戦後の陶晶孫、そして『淡水河心中』」に触発を受け、その後、私なりに研究を進めて成ったものである。資料の蒐集や調査については、小谷一郎埼玉大学教授を研究代表者とする平成十七～十九年度科学研究費補助金 基盤研究（B）「日中戦争と中国人日本留学生文学・芸術活動に関する総合的研究」の補助を得ており、これはその研究成果の一部である。両先生に深くお礼申し上げる。

（愛知大学現代中国学部教授）